

## 12.20 ガラパゴスのクリスマス

クリスマスが近づいてきましたが、我が家には現在キリスト教徒（家内）が不在のため、専らこの行事はなんの関係もありません。

であるにも関わらず、日本では、もとい、少なくとも私の住む横浜では、これが重大な年中行事でもあるかのように、商店街ではクリスマス大売り出し（どういう関係なのかさっぱりわかりませんが）というのをやっています。

本を買うと、クリスマスの贈り物のラップをおかけになりますか？

と聞かれますし、ハマケイの店では、クリスマス期間中、鶏のもものロースト祭りなんかやっています。

ケーキ屋さんでは、クリスマスケーキ予約は明日まで、お急ぎくださいと喚いているので、なんだか、私一人、関係ないやね、なんて知らぬ顔をしていると、あなた外国人？て顔されちゃいそうです。

もともと家内がいても、我が家では、別に何もするわけでもなく、まして鶏なんぞ食べはしません。

子供が小さいときは、クリスマスツリーを飾りましたけれどね。

ところで、クリスマスは、正確に言うと、イエス・キリスト（Christ）の降誕（単に誕生とは言わない）を祝う祭儀（ラテン語でミサ(missa)、英語でマス(mass)) のことですね。

もっとも正確には、ミサの本来の意味である聖餐式とは異なるのですが、説明すると大変なので省略。興味のある方は、近くの教会で聞いてみてください。

ただ、この辺は、もともと、かなりいい加減なところがあって、キリストの誕生日が 12 月 25 日というのも余り信じられていないのですね。

聖書にはキリストの誕生日がいつかなんて書いていませんし、今では 9 月生誕説が有力なんですね。

生誕日を無理矢理 12 月 25 日にしたのは、基盤脆弱な状況にあった初期のキリスト教の連中が、ローマで太陽の誕生日（この日から太陽の出ている時間が長くなる、日本では冬至）を祝っていた日に併せて、お祭りをする口実としたらしいということは、たいていのヨーロッパの知識人たちは知っていますから、今さら、堅いことを言っても仕方ないと思っているんじゃないですかね。

ところで、ケンタッキー・フライド・チキンじゃないけれど、日本でクリスマスに鶏肉を食べるのは、七面鳥がいなかったから、その代用品。これでは、ニワトリさんは気の毒ですねえ。

でもね、もともと、七面鳥だって、クリスマスとは余り関係がなく、アメリカに渡ったピューリタンが収穫祭に野生の七面鳥を捕まえて丸焼きにして食べたのが、イギリスに逆輸入され、食べられるようになったと言うんだから、元々キリストの誕生日のお祝いには関係がない。

ましてや、日本のニワトリさんにとっては、キリストさんの名の下に、生け贄になるのだから、冤罪よりもひどい話ですねえ。

さて、最後に、クリスマスケーキなんだけれど、日本で売っているような白い生クリームで覆われて苺が乗っているようなホールケーキをクリスマスに食べる習慣も、西欧にはありませんね。

昔、ちょうどクリスマスの方にフランスに仕事で行ったときには、ディナーの最後に、ブッシュドノエルが出てきましたけれどね。



最近流行らなくなったみたいだけれど、日本の白いクリスマスケーキは、ガラパゴス的発展の結果ではないですかね。

ものの本によると、日本でクリスマスケーキを始めたのは、ペコちゃんの不二家。なんと明治43年だそうです。

子供の頃、父が仕事の帰りにケーキを買って帰るのを首を長くして待っていましたが、今から思うと、なんだか、クリスマスというと、プレゼントとケーキを食べる「西洋風こどもの日」だったような気がしますね。



キリストさんのことなど頭の片隅もかすめなかったけれど、日本の商業って昔からたくましかったんですねえ。

## 12.22 古い昔のジングルベル

♪ ジングルベル、ジングルベル、鈴が鳴るう  
今日は楽しい、クリスマス、ヘイ！

♪ 雪を蹴りい、野山越えてえ…

と歌う人は、昭和 30 年代から 40 年代にかけて、子供時代を過ごした人。

えーっ、ホント？

ええ、ホント。

ちなみに、私たちがかつて歌っていたこの歌詞は、この歌の原詩「*Jingle Bells*」の今の訳には、見当たりません。

そもそも、原詩には、クリスマスって言葉が出てこないのだから、ちゃんとした訳の中に「クリスマス、ヘイ！」なんてあるはずがないですよ。これ、今で言う、実によくできたコマーシャル的「替え歌」。

えーっ、うっそおと言う人が多いんですが、  
歳がばれるから、声を出すのは止めましょう。

でもね、ちゃんとした訳だって、相当いい加減なんで、私たちの「ジングルベル」も、これはこれで良いんじゃないかと思うのですけどね。

ちなみに、英語が苦手な方には申し訳ないけれど、原詩の一番は、次の通りです。  
( ) の中は拙訳。

*Dashing through the snow In a one-horse open sleigh*

(1 頭立ての軽い橇に乗って、雪を蹴たてて)

*O'er the fields we go Laughing all the way.*

(野山越えて、高らかに笑いながら、ボクらは走る)

*Bells on bob-tail ring Making spirits bright*

(馬のしっぽの鈴が鳴るのに 心弾ませ)

*What fun it's to ride and sing A sleighing song tonight.*

(今宵、走らせながら橇の歌を歌うのは、なんて楽しいことだろう)

*Jingle bells, jingle bells Jingle all the way,*

*Oh, what fun it is to ride In a one-horse open sleigh, Hey!*

ホラ、ないでしょ。

「今日は楽しいクリスマス、ヘイ！」のところは、「なんて楽しい橇遊び、ヘイ！」となってますね。

下の写真は、この「*a one-horse open sleigh*」。



ところで、この原詩、二番から四番までであるのですよ。  
だれも歌わないからほとんど知られていないのですけど。

二番では、ふとっちょのミス・ファニー・ブライトさんと一緒に乗ったために、馬が耐えかねて、ひっくり返ってしまうし、

四番では、別の若い女の子を「*Take the girls to night*」(お持ち帰り?)しちゃうし、  
挙げ句の果てに、橇レースの馬に2ドル40セント賭けて、「ぶっ飛ばせ! ぶっちぎりだあ」なんて叫んでいるから、こりゃ、日本じゃ、クリスマスソングは無理でしょうねえ。

さて、私が「ん?」と思ったのは、ジングルベルの鈴の位置。

この詩を読むと、どう見ても、鈴は、馬のしっぽについている。

三行目。*Bells on bob-tail ring*

「*bob-tail*」って切り尾(短く切ったしっぽ)のことですものね。

この写真は、切り尾の馬。



これ、変じゃありませんか?



## 12.23 きよしこの夜

明日は、クリスマスイブですが、先週やっと日仏のフォーラムの報告をボロボロになりながらもなんとか乗り越えた自分へのご褒美に、クリスマスコンサートに行ってきました。

曲は、誰でも一度は聞いたことのある有名なものばかり。  
外の厳しい寒さとは別天地の暖かいコンサートホールで眠気に誘われて、ウトウトしながら *heavenly peace* のような時間を過ごしてきました。

アンコールが何曲かあって、その中の一つが「清しこの夜(*Stille Nacht*)」日本語と英語で歌われたのですが、昔私の覚えていたものと少し歌詞が違うのに気がきました。

そのときは些か夢うつつ、余り気にとめていなかったのですが、自宅に帰って、新聞を見ると、たまたま偶然に「きよしこの夜」の記事（朝日新聞の「b e」のうたの旅人）が目飛び込んできました。

この記事を読んでいますと、日本語の歌詞の訳はかなり変遷しているようです。

私が覚えていたこの賛美歌は、昭和 31 年のものようで、

「きよしこのよる ほしはひかり すくいの御子は みははのむねに ねむりたまふ ゆめやすく」

でしたが、昨日聴いたものは、

「みははのむねに」の部分が「まぶねのなかに」になっていたのですね。

「まぶね」は、馬の飼い葉をいれておく桶のことで、「馬槽」と書きます。



私、「みははのむね」の訳については、ラファエロなどの絵でしばしば幼いキリストが聖母マリアに抱かれているのを見ていましたので、全く疑問を感じていなかったのですが、馬小屋で生まれたイエスが飼い葉桶に寝かされているのも、まあ「有りか」と思ったのです。

ここからは私の悪い癖なのですが、念のために原詩はどうなっているのかを確かめてみたのです。

ところが、原詩（ドイツ語）は日本語訳とはかなり違っていて、「みははのむね」も「まぶね」も登場しません。

ちなみに、原詩は次の通りです。

ドイツ語なんか読めるか！

とおっしゃる方のために、拙訳を付けておきますので、そちらをどうぞ。

*Stille Nacht, heilige Nacht!* （静かな夜、聖なる夜）

*Alles schlaeft, einsam wacht* （全てが眠りについていて、ひとり輝いているのは）

*nur das traute hochheilige Paar.* （一組の誠実で聖なる夫婦）

*Holder Knabe im lockigen Haar.* （それに愛らしい巻き毛の男の赤ちゃん）

*Schlaf in himmlischer Ruh,* （天国のような安らぎの中で眠りなさい）

*Schlaf in himmlischer Ruh!* （ " ）

キリストは、カーリー・ヘア、つまり巻き毛だったことがわかります。

ちなみに

現在歌われている英語の歌は、

*Silent night, holy night!* （静寂(しじま)のなかの、聖なる夜）

*All is calm, all is bright.* （全てが静かで、光り輝き）

*Round yon Virgin, Mother and Child.* （聖母と御子の周りを取り巻き）

*Holy infant so tender and mild,* （聖なる赤子は、優しく穏やかに）

*Sleep in heavenly peace,* （天上の平和の中に眠りたもう）

*Sleep in heavenly peace.* （ " ）

( ) 内、拙訳。

馬槽の中でも母の胸でも、キリスト教徒でもない私にとっては、どうでもいいことなのですが、どちらも、翻訳者が勝手に？付けたんだというのがわかりますね。

ついでにもう一つ。

昨日の曲目の中に三つの「アヴェ・マリア」が入っていたのですが、三つは、それぞれ違う趣があって楽しめました。

私が一番気に入っているのは、バッハの平均律クラヴィーアの前奏曲をグノーが編曲したもの。

歌詞も、大天使ガブリエルがマリアに受胎告知のお祝いを申し上げるルカ福音書の言葉が入っていて、やはり格が違う感じです。

ところで、アヴェマリアは、ラテン語で「*Ave Maria*」。  
意味は、受胎を言祝ぐ「おめでとう、マリア」です。

これが中国語だと、「萬福馬利亞」。  
う～～ん。中華饅みたいと思うのは、私だけ？

## 12.24 サンタのプレゼント

今日は、クリスマス・イヴ。

キリスト教信者でない私も、街中に流れるクリスマスソングに何となく心浮かれ、たまにはちょっと贅沢でもしようかなって思ってしまう。

といっても、七面鳥ならぬチキンのローストくらいですけどね。

え、食べないって言ってなかった？

ハ、ハ、まあ良いじゃない。



それにしても、ニワトリさんにとっては、迷惑なことですねえ。

本当は関係ないのに、この際、似ていると言うだけで食べられちゃうのですからね。

人違いならぬ、鳥違い。無実なのにねえ。

こういうのも濡れ衣と言うのかな。

ところで、濡れ衣を着せるってどこから来てるか知ってます？

無実って、実がないことでしょう。

つまり、実のない→簀がない、簀がない→衣が濡れる、濡れ衣。

らしいですよ。

大田道灌みたい。

あ、のっけから横道にそれましたけど、クリスマスには、サンタクロース。

いい歳して、未だに誰かプレゼントくれないかなって、心のどこかで思っているのだから、自分でも始末に負えません。

只より高いものはないと重々承知はしているのですが、やっぱりプレゼントほど、嬉しいものはありません。

人間誰しも、これには弱いらしくて、大昔から、ちょっとしたプレゼントに目がくらんで、大切なものを失ったり、みすみす外れ籤を引くというのは、日常茶飯事。

みんな、心当たりがありますよね。

プレゼントは、されるより、する方に回れ、が大原則なんですけど、これが自然にできるのはたいしたもの、生まれつきの「××たらし」か詐欺師。

とすると、サンタクロースは「××たらし」？  
なんて考えていると、やっぱりプレゼントは来ませんねえ。

ところで、街中でテッシュを配っているサンタクロースは別として、世界公認のサンタクロースというのがあるようで、この前テレビで説明していました。  
それによりますと、国際サンタクロース協会というのがあって、そこが認定した国際公認サンタが全世界に 200 人ほどいるみたいですよ。

これ、誰でもなれるわけではなくて、資格が必要と言っていました。  
どんな資格？

えーっと  
白いあごひげを生やしていて、その長さが 30 センチ以上、  
体重は、120 ポンド以上で、  
トナカイの轡を扱えること

ウソです。  
信じました？

本当は、国際認定試験があるそうで、  
デンマーク語か英語でのスピーチ審査に合格し、  
サンタクロースの言葉「ホー、ホー、ホー」が話せること（？）  
煙突から家の中に入る実技試験などにパスすること（えーっ）  
だそうです。

私のウソの方がホントに聞こえるでしょ。

おしまい、私が昔から気になっているのは、サンタさんが担いでいる袋の中味。  
あんなに大きいのに、軽そうですよね。

きっと、過剰包装に違いはないのだけれど、よおーく見ると、大きさにかなりの違いがあるので、同じものではないことは確かです。

何が当たるかは、運次第。ピンキリですね。  
あ、このピンキリという言葉。これポルトガル語なんですね。

「ピン」は「ピンタ(点)」で 1 のこと。  
ピンハネのピンですね。

「キリ」は「キリスト様の十字架」で 10 のこと。

十字架貰っても、嬉しくないなあ。

こういうこと考えていると、どうみても来そうもないので、やっぱり、自分で自分にプレゼントするしかありませんね。

あ、そうそう、国際公認のサンタさん、日本人も一人合格しているようですよ。

## 12.25 トナカイと靴下

ジングルベルで出てくる橇は、切り尾の馬ではなく、トナカイが引いている絵が多いので、今日は、サンタクロースの乗っているトナカイについて。

実は、先日、ある集まりで、サンタさんの乗っているトナカイは、雌だと聞いたことがある、と言いましたら、みんなから、「鹿の雌は角が生えないのは常識ですよ」、「サンタさんのトナカイもあんな立派な角があるのだから雄に決まっていますよ」、と総攻撃を受けてしまいました。

なにせ、大昔の記憶だから、私もさすがに自信がなくて、言い返せなかったのですが、ちょっとだけ、癪に障るので、手持ち資料を見直してみました。

すると、やっぱり、トナカイだけは雌にも角があるのですね。  
ホレ、ドヤ！（どや顔）

以下は、手持ち資料にある記述。

「雌のトナカイの角には、雪を掘り起こして、エサの苔（**Caribou moss**、カリブーはトナカイのこと、モスは苔）を食べられるようにするという用途があります。ですから、トナカイの雌の角は、子供たちのためのエサをとるために、雪の積もる秋冬に生え、夏には抜け落ちます。

一方、トナカイの雄の角は、春に生え、冬には抜け落ちます。」

ですからね、冬にサンタクロースを乗せて走る橇を引くトナカイに角があるとすれば、それはおそらく雌なんですねえ。



ところで、実は、こんなことはどうでもよくて、私の興味はトナカイの角。

鹿の角は、昔から精力剤として有名ですよ。

高価強力なドリンク剤には、よく見ると、鹿の角が入っています。

鹿茸(ろくじょう)と書いてあるのがそれです。

男性は、歳をとってくるとこれが必要？になる場合が多いのですが、女性の場合は疲労回復に効くそうです。

では、トナカイの角はどうか。

実は、トナカイの角も強力な効力を持っているそうなんですよー。

ホントはね、私、秘かに、思っているんですよ。

サンタクロースのお爺ちゃん、春になってトナカイの雌の角が抜け落ちたのをこっそり拾って粉にして飲んでいるんじゃないかとね。

だって、屋根に登って、煙突から家に入って、プレゼントを置いて、また煙突から這い上がってくるなんて、誰にでもできることじゃあ、ありませんよ。

これも、一度あるところで言いかけて、顰蹙を買いそうになったので、慌てて口を噤んだことがあって、ここで初公開。

どう思います？

さて、サンタクロースが持ってくるプレゼントを入れるのは、昔から靴下と決まっています。でも、子供の小さな靴下では、入りきれないと心配する子もいるんじゃないですかね。

靴下は、ポルトガル語で「MEIAS」（メイアス）。

またまた、ポルトガル語かと言われそうだけれど、日本の歴史を調べていると、近世史ではポルトガル語は欠かせないのですね。

ところで、日本へ西洋の靴下「MEIAS」（メイアス）が伝来したのは、南蛮貿易の盛んだった安土桃山時代。

たかが靴下、とお思いでしょうが、これがどうして、なかなかの優れもの。

「MEIAS」（メイアス）は、伸び縮みしたのですね。

ポルトガル人からメイアスの編み方を教わった「長崎の女」から、あっという間にメイアスは全国に普及するのです。

これが今の「メリヤス」編み。

ちなみにメリヤスは、漢字で「莫大小」と書きます。

「莫」は「ない」という意味ですので、これは、大小無くフィットするということを表します。

サンタさんは、このメリヤス編みの「MEIAS」（靴下）にプレゼントを入れていたのですね。

最後に、莫にちなんで、もう一つ。

バカを表す「馬鹿」が、当て字だということは御存じかと思いますが、もう一つのバカである「莫迦」も中国の当て字です。

その語源は、残り少ない字数ではとても説明しきれませんが、「迦」は、お釈迦様の迦ですから、「迦」が無いというのもなかなかうまいなあ、と思います。

あ、「莫大」は、「これより大なるは莫し」の略ですから、大きくないとは考えないで下さい。

## 12.28 点々四つ

このところ年賀状書き以外、大変ヒマな状況にある私。  
滅多に見ない全日本女子フィギュアを見るときもなしに見てしまいました。

でも、浅田真央さんが、お母さんの死にめげず、華麗な演技で私達を魅了し、見事優勝されたのには、私もホントに感心しました。  
私が母を失ったのは 30 代の後半でしたが、かなり長い間動揺が続き、仕事に身が入らなかったことを覚えていますから、本当にスゴイと思います。

女子のフィギュアは、動きの少ないわが国の舞と比べて、非常にダイナミックな氷上の舞ですね。  
私は、ジャンプに重点が置かれているように見える評価には余り賛同できず、ステップ、表現力、芸術性といった方に目が向いてしまいます。

「舞」という字は、人が神の前で踊っている姿を字にしたものですが、彼女のスケーティングを見ていますと、この字が動いているように見えてしまいますから、不思議です。

ところで、私がとても好きな一瞬は、スケーティングに入る直前のほんの僅かなポージングの瞬間です。



舞を始める前の不安と緊張、高鳴る胸の鼓動、静まりかえる大観衆。  
ここで動揺したのでは、素晴らしい舞など踊れるはずもなく、無心の境地に立つことが必要なのではないかと思います。

良きピアニストが最初の音符を奏でる直前、剣道の試合で「始め」がかかる一瞬前、「上手くやろう」とか「失敗したらどうしよう」とかそんなことは、もう何も頭に浮かばず、身体だけが存在している、そのような状況にあるのではないかと想像します。

「無」という漢字は、「舞」を踊り始める一瞬前のポージングの姿を表したものだと言われていますが、全日本の演技に入る直前の浅田真央さんの姿は、無心という言葉にふさわしいものだったように、私には見えました。

ところで、「無」の字の下にある「点々四つ」は、人の手足の形。

ついでに、白状しますが、これもつい見てしまった有馬記念で優勝した「オルフェーブル」。  
ゴール前、実に綺麗な姿でしたね。  
ご存じ、「馬」という字も、たてがみと尾を靡かせて疾走する馬の姿を字にしたものですが、  
この字の通り、四本の足は、宙を飛んでいるように見えます。



それに比べて、「熊」になると、四本の足は身体に比べて短いせいか、どう見ても飛ぶように走るのではなく、「ドシドシ」とのし歩くように見えるなあ、と昔思っていました。



ところが、一昨年熊が里に下りてきていろんな被害が出るようになったことがあります、  
害獣駆除の法制に関する原稿を書こうとして調べていて分かったのが、「熊」の「点々四つ」  
は熊の手足じゃないということでした。

えーっ、違う？

今まで何十年もそう思ってきたのに、じゃあ、何？

白川静博士の書かれた本によると、この場合の「点々四つ」は、「炎」。

上の「能」は、脂の良く乗った肉。

つまり、熊の肉は、火で炙ると滴り落ちる脂がすごいので、この字が当てられたのだそうです。

白川博士によると、「点々四つ」は、魚や鳥も含めて手足（魚の場合は、背と胸と尾の鰭）  
を表している場合と火で下から炙る場合の二つのケースがあるのだそうです。

ということが知識としてインプットされた今も、意固地な私は、「熊」は手足の方が良いと思うけどねぇ、と未練たらたらなのですが。

ところで「然」という字。

どちらだと思えます？

これは炎。

上の右は「犬」。犬の左は「月」。

「月」は空に浮かぶ月ではなくて、いわゆる「にくづき」。

先ほど出てきた「脂」とか「胸」とか「脚」とかの「月」。

ということは？

この「然」という字、犬の肉を神様に供えるために焼いているという意味なんですね。

中国では、犬の肉は昔からご馳走の一つ。

あ、今日焼き肉でも食べに行こうかなと思っていた方、ゴメンナサイ。

浅田真央さんのお話しに留めておこうと思っていたのですが、ツイ。